

☆Heroldo de HEL

N-ro 19.....5, JULIO, 1987

札幌市白石区東札幌2条6丁目尾田ビル2F
中央オフィス学院 気付 ☎(011)824-0715(学院用)
北海道エスペラント連盟
(編集部) 高橋要一, 小林貴美子, 宮井康夫



(書齋にて近影)

D-ro 山賀 勇 逝去

小樽市の山賀 勇先生が6月6日午前9時37分急性心不全のため逝去された。

3日前に呼吸困難を訴えられ市立小樽病院に入院、急拠手当をうけ、その後酸素マスクを着けながらも見舞の方々と話を交わされるまでに回復されたのですが、6日朝突然心不全症に襲われたとのことである。享年81才でした。

今日までわがエスペラント界に対する物心両面の御援助は真に筆舌につくし難いものがある。

まさに「巨星墜つ」、われわれ後輩は何をもって先生の御威徳に応えん呼。 合掌 (高橋要一)

☆山賀 勇氏略歴☆

1905年8月27日新潟県村松町に生まる。
1930年新潟医科大学卒業、1937年医学博士、1941年以来小樽市で眼科医院を開業現在に至る。エスペラントは1922年中学4年の時「エスペラントの鍵」を手にして初めてする。翌1923年新潟高校で1年先輩の林不二男氏等の、1926年新潟医大生理学横田武三教授の指導を受ける。1930年青森県立病院在任中葛西藤太氏、神 潔氏と交わる。1936年北大にて研究中に札幌市で日本エスペラント大会 (第24回) に出席、戦後1947年小樽エス協会再建にあたり会長となりエス運動を始める。後HEL会長、1968年日本エス大会会長 (札幌) JEI参与、現JEI顧問、その間1976年小樽市「教育文化功労者」として表彰さる。1950年小樽ユネスコ協会の発足に尽力す。ユネスコ国内委員に選任、1974年小樽ユネスコ協会の会長就任。

1982年国際ロータリー、クラブ第251地区ガバナーに就任。エスペラント世界大会に4回出席。1965年第50回東京、1966年第51回 (ブタペスト)、1978年第63回 (バルナ) 1983年第68回 (ブダペスト)。

著書に「日本眼科全書第1巻」分担執筆、1978年バルナ大会参加の記 (文集) 編集、1940年「眼科のしおり」、1983年随筆「一冊の本」 (近代文芸社)。

—北海道エスペラント小史第2巻より—

第2回HEL役員会

日 時：1987年4月25日

場 所：ホレンコ事務所

第51回北海道エスペラント大会実施要領 (実行委員会報告)

1. 大会日時：9月12日15時受付開始～
同 13日15時閉会まで。
2. 会場：北海道クリスチャンセンター
札幌市北7条西6丁目(☎011-736-0104)
3. プログラム
 - ①第1日目(9月12日 土曜)
15時～16時：受付
16時～17時：講演(ESPの思想、歴史)
18時～21時：晩餐会(親睦、交流を図る)
 - ②第2日目(9月13日 日曜)
9時～9時15分：受付
9時15分～10時：定期大会
10時30分～12時：ワルシャワ大会参加報告
12時～13時：昼食
13時～15時：今後のエスペラント運動の展開協議(200年に向けての討論会)
15時：閉会
4. 参加申し込みについて
 - ①出欠について同封のハガキでお知らせ下さい。
 - ②参加日は次の通りです。
一般参加：2500円
家族・学生・不在参加：1000円
晩餐会参加費：1500円
 - ③図書の委託販売を予定していますが、購入希望の図書がありましたら、記入して下さい。
希望者がいない場合は中止します。
 - ④宿泊予定の方は忘れずに記入下さい。
宿泊料金は一人3300円の予定です。
申し込みの締切は7月31日とします。

I. 報告事項

①第1回役員会報告

- a. NHKギャラリーにおけるE展覧会は会員の協力によって成功裡に終了した。
- b. HEL、SESの事務所は吉原SES会長の好意により、新吉原事務所に移転が終了した。
- c. 第2回合宿研修を山部において5月連休に実施する準備が整った。参加予定は20数名の予定。
- d. JEI大会開催地要請辞退について(時期尚早)として回答する。

②その他

相沢顧問の入院について：持病の悪化により昨年12月から国立西病院に入院中。

II. 協議事項

①第51回HEL大会日程について

- ・日 時：9月12～13日(2日間)
- ・場 所：北海道クリスチャンセンター
- ・役員の変更(以下の二案を提案する)
 - a. 半数位づつ交替したらよい。
 - b. 役員として任務分担が困難な者の辞退による欠員の補充選挙のみとする。
- ・プログラムの詳細については大会準備委員会に委託する。

②監査委員の選任について

- ・昨年のHEL大会で後日選任することになっていた監査委員に次の方を選任する。

大友 鞆一 阿部 映子

以上

故山賀先生の葬儀とその後

お通夜の儀は6月8日午後6時半、告別式は翌9日正午半から、小樽市医師会が中心になってそれぞれ医師会館で厳粛のうちに挙行された。

お通夜の儀には、札幌から吉原、木村、高橋要一、児玉、宮岸、河原、小林、馬場の外、苫小牧から北畠が馳せ参じた。小樽では、江口、切替、山本昭二郎の外、数人のエス会員と市川市に在住の高橋達治氏も九州旅行から飛んで参列した。会葬者は会館の大講堂をうめつくした観あり、総勢400名にも達しようか。お通夜の儀で曹洞宗の住職の説話の中で、また葬儀委員長の医師会長の挨拶の中でも、先生がエスペラントの大家で国際的に有名な人と言及されたことが印象的であった。式場を飾る生花も所狭しと並んでいる中で、小樽エス会、北海道エス連盟、日本エス学会、万国エス医師協会から寄せられた生花は、ひときは人の目に付きやすいところに置かれていた。

告別式には、市川市の高橋氏のほか、江口氏を始めとして10名程の小樽の現、元エス会員が参列したが、エスペラント界を代表して江口氏が追悼の献詩4句を読上げられた。長文の弔辞が読上げられる中で、氏の献詩はむしろ会葬者に深い感動を与えた様だ。本号に掲載されている札幌の木村氏の追悼詩集の中にそれを見ることができよう。エス関係の弔電は、日本エス学会、万国エス医師協会、UEA副会長 梅田善美、HEL、札幌エス会、小樽エス会、東京のザメンホフ・クルーボ、石黒なみ子その他から寄せられていた。

なお、6月20-21の両日をかけて、江口、切替の両氏を応援するためにHEL会員のうち、北畠、渡辺康子、渡辺晋道、藤平、砂野、阿部、

特集 嘆・山賀 勇先生

鎮魂歌

札幌市 木村喜壬治

- ☆ 兄妹同志のかなめとありし大兄なりき
エス語の道を拓かざらめや
- ☆ 親のごと異国の友に慕はれし
きみが^{ひび}継永久に伝へむ
- ☆ 北海道にエス語の若芽育ちしを
ザメンホフに伝へ賜はれ
- ☆ 言の葉の壁をこぼたむエスペラントの
若芽育てし大兄がいさおし
- ☆ 誓^{ちか}めて大兄が^{ひび}影に安まりし
数年まちしブルガリアの婦人
- ☆ ワルシャワのエス語百周年にわが行かむ
大兄が見果てぬ夢を背負いて

馬場、児玉達が、先生宅を訪れ、エスの蔵書整理や外国から寄せられた手紙の分類整理をし、更に先生の死を知らせる宛名書きなどをしてきた。

私達は、沢山ある図書雑誌類のうち、先ずは手初めにRevue Orientale, esperanto de UEA, El Popola Ĉinioの欠号部分を明らかにし、他の会員の協力で欠号を全部埋め尽くした段階で、札幌大学の図書館に寄贈する手筈を整えている。切替氏が目下取組み中なので、会員諸氏の今後の協力を期待している。 (記：児玉、1987-07-05)

「巨星おつ!!!」

SES会長 吉原 正八郎

山賀先生は、北海道エスペラント界の偉大な指導者でありました。その山賀先生が、こつぜんとして幽明境を異にしてしまわれました。まことに痛恨にたえません。「巨星おつ!!!」の感じです。

毎年夏に開かれた北海道エスペラント大会には、あの温顔で、水の流れるようなエス語を話しておられたお姿が、まぶたに浮びます。

先生には、エスペラント界だけではなく、ロータリークラブでも接する機会がありました。先生は地区ガバナー（北海道の西半分地区の連合会々長）として、任期一年間に管内五十あまりのクラブを公式訪問して廻っておられました。また厚生年金会館で開かれた地区大会には、ガバナーとして演説をされましたが——私は先生の日本語によるスピーチを聞いたのは二度目でしたが——その堂々たる演説ぶりは、満場を圧倒しました。

このたびは、先生のご遺志により、ご遺体は北大へ献体された由ですが、私も生前に先生から献体をすすめられたことがありました。そのころ私もその気になって家族に話したところ、拒否されてしまい、先生のご期待に添うことが出来ませんでした。

輝かしい巨星をうしなって、北海道エスペラント界には、大きな穴があいた感じですが、同志の諸兄姉と協力して、山賀先生のご偉業を引き継いでいきたいと思っています。

——昭和62年6月20日——

山賀先生を偲んで

小樽市 江口音吉

私の姉は和裁をやっていて山賀先生の奥さんのところに出入りしていたものです。姪は先生のとこで看護婦を8年つとめていました。そして個人的に何かと御世話になって来ました。

第68回世界エスペラント大会には山賀先生と参加したのです。「旅行の日程にソ連が入っている、まだ見ない国だからよかった。」と言っていました。ブタペストでは先生と永年文通していた女医のガスパーエレナさんに会えると喜んでいました。私も石黒湊子さんに引き合せて頂き語り合いました。郊外に住む妹の S-inoガブリルルーナさん宅に連れて行かれたりして田園風景の中で皆で写真をとったりした思い出があります。エレナさんは妹にも言はないが重病にかかっていると山賀に語ったのでした。そのご一年後に彼女は逝くなったのです。ブタペストでは三沢先生の紹介で札幌教育大学出身の野村優子さんに会いました。ホテルに来てもらったり本人のアパート4階に行って日本の蕎麦を御馳走になったりしました。扱世界大会では医学者分科会にも連れて行ってもらったことがあります。パリーに宿泊した時は早く起きて近くの子エルリー公園を二人で散歩しました。

59年8月盛岡の日本エスペラント大会の帰途、北島さんと一緒に北海道に渡った韓国の S-rino イウングム、F-rinoキムギンヒさんと四人で天狗山展望台に登ったのですが、この時の先生は本当に嬉しそうでした。これが先生の明るいお姿におめにかかった最後であったような気がします。

ところで最近は例会に行っても先生は疲れたと

よく云っておりました。そして3日に入院されたので御休みになれると一安心、おちついて見舞にゆくべく切替さんと話していたのです。ところが5日夕方私に電話があり、かけつけたのです。酸素マスクをかけているものの、お元気でして高橋達治氏の義兄の佳山さんの著書「牧人日記」が送られて来たがつかれていて読めないから代りに読んで感想を書き送ってくれと云われたのです。東ドイツからの文通の手紙が来ているが、切替さんに返事を書いてもらいたいと思っているとのことでした。ところが翌6日午前突然逝くなり私も気が動転して、知らせなければならぬのに知らせない人もあったりして、申しわけないと思っています。

一瞬前に君ありて 一瞬あとに君やなし
人間ははかないものです。

山賀先生を偲ぶ

昔小牧市 北島 瞳

6月6日いつものように札幌での Kurso を終えて夜10時半帰宅すると、児玉さんから「小樽の方が亡くなられた」と連絡があったと知らされても、山賀先生のことは全然思い当らず、この日の朝急逝されたと聞いた時はわが耳を疑って茫然としてしまいました。丁度この日、Esp 発表百年記念HEL大会準備委員会がプログラムの大綱と分担を決めて大会成功へ向けて出発した日というのも何かの因縁でしょうか。

以前から私は、先生に「そのうちに必ず日本大会を若い方達と開きますから、お元気でいて下さい。」とお願ひし、「北島さん、私はそう簡単に

クタバリませんヨ」と先生には珍らしく冗談を交えながらその日の来るのを楽しみに待っていて下さったのに、何ということでしょう、その約束もいつ果せるかわからないうちに Majstro の所に旅立ちを急がれたとは……。

昨年10月アメリカの友人 s-ro Vathis を伴って先生をお訪ねしたのが最後になってしまいました。その時は少し弱られたかと思われるだけで、いつもの柔和な眼差しでやさしく見守って下さった先生のお姿が昨日のように思い出されます。

先生は小樽ESP協会会長、JEI、HEL、UMEA の重要な地位に永年在って、ESP 運動には物心両面のご援助と、後進の指導に力を惜しみなく注いで下さいました。特に初学者に対する心配りは非常にやさしさにあふれ勇気を与えて下さるものでした。

HEL 40 回大会で功労者をその労をねぎらい表彰したときには、その頃HEL機関誌Leontodo のタイプ打ちを受け持っていた私のところに先生がそっと近付いていらして、「われわれよりもあなたの働きにこそ感謝しなければいけない」とおっしゃって、私のためにと用意して来て下さった品を下さり、ねぎらいのことばをいただいたことは、今でも忘れ難いことです。

「北海道ザメンホフ」と内外の友と共に尊敬していた先生、その先生との約束も果さないうちに、ご逝去の報に接し、私には心残りが非常に大きく、お通夜の席で先生にお詫びしました。札幌の活動が活発になりつつあるを見ていただいたのがせめてもの慰めです。

山賀先生、これからは多くの親しい方達とわが Majetro を囲んで楽しく語り続けて下さい。そして私共の進む道を照らし見守ってください。

D-ro山賀追憶

苫小牧市 星田 淳

山賀さんに初めて会ったのは、初めて北海道の esp-ujo に顔を出した時、即ち1953年10月小樽での第17回北海道大会だったと思う。当然 D-ro は若々しく精気溢れていたように思う。当時小樽ESP協会は隆盛を極めていた。機関誌 Leontodo はその美しい表紙で全国に知られ、この年の第40回日本ESP大会で機関誌賞を受けたばかり。この Leontodo、HELの機関誌になったのはかなり後のこと、当初は小樽の同志の企画した「文学同人誌」だった。'52年7月の第1号表紙のETA LITERATURGAZETO LEONTODOの文字にその抱負が示されている。毎号小樽の Gesamideanoj は実によく書いていたが、S-ro高橋達治が第1号に書いた、「私達の movado についてはすべてであるが—山賀さんという支柱がある。……山賀さんを頼りにする……」という文が、当時の山賀さんの活動をよく表している。当時のLEONTODOに毎号「花園凡太郎」の筆名で出ていた彼の文は、二葉亭四迷、ロシア文学、アンデルセン、文通相手紹介、翻訳文の比較など実に豊富で興味ある内容だった。

北海道のESP運動がどれだけ D-ro のおかげを受けたか、当時からの働き手は皆知っている事だが、一々語り尽くせない。

ユネスコ協会、国際ロータリークラブなどD-roの社会的地位にふさわしく活動分野が広がるにつれて、ESPに対する参加の機会がだんだんへるのは止むを得なかった。しかし、財政面では、いつもD-roの大きな協力があったと思う。その寄与

を生かすだけの活動を、我々がやったかどうか、心残りである。例えば、北海道エスペラントセンターの閉鎖。あのセンターは当時の北海道の運動を上げるための、若干背のびした計画で、それなりの効果もあったのだが。最後には、山賀さんや、維持員の協力の意志はあっても、それを使いこなすだけの活動が粗めず、閉鎖に至ったのは、やはり我々の力不足だろう。

一方'68年の第55回日本ESP大会(札幌)や、'79年の Ainaj Jukaroj 出版は、D-roの援助を軸に同志の協力がみのった輝しい実績だった。

Adiaŭ, nia estimata
D-ro Yamaga!

“ESP教室”で偲ぶ

札幌市 馬場恵美子

6月20日、21日の両日、故人となられた山賀先生のエスペラント教室の整理を手伝わせて頂きました。参加したのは札幌から8名、小樽から2名です。小樽市花園町の真中にあるお宅の“エスペラント教室”と書かれた部屋にはザメンホフの肖像、沢山の書籍、手紙、世界大会誌、写真、先生のエスペラントにかける情熱と長年の活動の広さが偲ばれるものでした。

先生とは電話でしかお話をする機会はありませんでしたが、近年のHELの活動状況について、とても喜んでいらっしやっように思われます。

Rondo pupiloj で小樽勉強会を訪問する計画を立てていたのに実現できず残念でたまりません。

先生の死去が“エスペラント発表百年”の年に……と思うのは私だけでしょうか？

北海道のESP運動がこれからと言う時に……。

SPIRITA INTERNACIIĜO

Kiam mi loĝis en Sapporo, mi kaptis ĉiujn ŝancojn por renkonti alilandanojn. Por kapti la ŝancojn, mi kuraĝis preni liberan tagon de mia laborejo kaj pasigi tempon kun tiu aŭ alia alilandano. Gastoj el aliaj landoj rakontis al mi mirindajn kaj fremdajn aferojn. Mia scivolo ĉiam pli kreskadis. Legi librojn kaj korespondi en Esperanto estas interese. Sed aŭskulti rakonton de kaj paroli kun alilandano donas vivan instruon, ne forgesiĝeblan facile. Mi sentis, ke mia vidkampo pli kaj pli larĝiĝas; mi komprenis, kio estas internacia interkompreno. Mi sentis, ke mi estas anime riĉa, loĝante en du luĉambroj kun malmulto da mebloj. Havi geamikojn en alilandoj estas trezoro. En internaciaj kunestoj mi ridis samtempe kun alinacianoj, kio estas mirakla por ne-Esperantaj internaciaj kunsidoj. Tiun miraklon mi akceptis kiel unikaĵon de Esperanto — unikaĵo, kiu devas tamen normaliĝi en la internacia vivo. Tiele komenciĝis la

internaciigo de la spirito.

Tian sperton havas ĉiuj aktivaj esperantistoj. Eble ankaŭ vi, ĉu?

Internaciaj intelektaj interŝanĝoj, interkomprenado kaj antaŭenigo de la internacia komunikado — tio estas praktikata de esperantistoj. La spirita internaciigo de ili estas ia riĉaĵo, utila trezoro de la homaro.

Atentante pri tiu flanko de Esperanto, Unesko faris rezolucion en 1985-11-08 por la 100-jara jubileo de Esperanto (1887~1987).

La statuto de Unesko skribas, ke ofte kaŭzoj de militoj estis interpopolaj suspektoj kaj malfidoj pro la ne-sufiĉa kono pri aliaj popoloj kaj ke pacon oni povas konservi surbaze de la intelekta kaj spirita solidareco de la homaro.

Esperantistoj estas pioniroj de la internacia vivo. Kial timi aŭ honti pro onimokoj? Ni povas kviete esti memfidaj, havante spiritan internaciecon kiel riĉaĵon.

Nagata Akiko

(編集者からひとこと) 我々の依頼に早速、オランダの Woessink-Nagata Akiko さんから原稿を送っていただき、本号の紙面を飾ることが出来ました。彼女は、"UN' KAJ NI" (国連と私達)の編集を主宰され国連における言語問題やエスペラントに関する新しい情報を伝えてくれています。青春時代を札幌で過ごされ、熱心なエスペランチストとして豊富な国際生活を体験されている彼女の "Spirita Internaciigo" は、一読に値します。表現も易しく、初学者の方も、辞書を手にぜひお読み下さい。

私とエスペラント (1)

ロシア語は世界 人民の共通語！！

三沢 正博

私は「北海道エスペラント連盟会長」という肩書をいたゞいているが、それがいかに不相応なものであるか、そして、にも拘らずお引き受けした理由については、以前書いたことがあるので、繰り返さない。ここでは、それに関連してエスペラント運動の本質に触れてみたい。

第一、私は同学の諸氏が思っているであろうほど、エスペラント語ができないのである。それを学び始めたのは1950（昭和25）年のことから、相当昔だが、ずっと続けているわけでないで、読書量は僅かなもので、依然として初学者並みである。次に、エスペラント運動に関与する仕方も、情熱的ではなく、どちらかというと冷やかに激流に抗して力泳している人を横目に、併行して岸边を歩いているようなけしからん男である。もちろん、心から声援を送りながらなのだが。

だが、今日状況の中では、エスペラント語のベテランで火のような情熱を持っている「真正」エスペランチストよりも、私のような人間を頭に置いといた方がよいと考える実に賢明な人々がいて、私もなるほどと思う所があるので、当分は、不相応な肩書をけがすことを敢てしているのである。

1956（昭和31）年に東京の大学を修了して北海道学芸大学（今の教育大学）の助手になったが、それから1965（昭和40）年までの約10年間、エスペラントは私の意識にのぼらな

った。考えてみると、この間は専門の研究に没頭していた時期で、それ以外のことは殆んど眼中になかった。職業人として社会に一定の位置を占めるまでの数年間、あるいは十数年間というものは、誰れにとってもそうなのではないかと思う。だから、学生時代にエスペラントに魅せられ、胸熱くして、時には「頭にきていた」連中が、社会人になった途端に、突然、若気の至りとばかりに、夢多き青春と共にエスペラントの夢を忘れたとしても、私は少しも非難する気にはなれない。これは私だけではなく、エスペラント界そのものが、そうなのであって、去るものを「脱落者」ときめつけたり、謀反人のように追及したりはしない。実は、この寛容さこそがエスペラント運動を支えている本質なのだということが、分かってきた。

私の場合は、「専門の研究に没頭していた」ため時間的余裕がなかったという理由以外にも一つ、重要な理由があった。これについて書いておくことは、諸氏にとっても何らかの参考になると思うので、私事ではあるが、敢て書かせていただく。私は大学でロシア語を学び、ソビエト教育学の研究を主な仕事とすることになったので、ロシア語とは切っても切れない関係にある。私は現職に30年いるが、そのうち20年間くらいは、明けても暮れてもロシア語の書物と首っ引きで格闘していて、研究に必要なドイツ語など若干の外国語の書物を読むことはあっても、恥ずかし乍ら、日本語の本を読むことは、殆んどなかった。実際、当初は、日本の学者が書いた教育史学の本よりも、ソビエトや東独の学者が書いたそれの方が、よほど分かり易く、そして共感するものが多かった。社会科学者はもとより自然科学者の中でも、ロシア語ができなくては仕事にならぬ、というような雰囲気、1950～60年代には、あったよう

に思う。当時の日本、とくに青年層や知識人の間でのソ連の人気は、今日からは想像できない程に高かった。ロシア語もまた然りである。

労働者農民の国ソ連、解放された大地ソ連、そこで話されているロシア語こそ、人民の言語であるという自負は、ソビエト学校教科書の文句であるばかりでなく、わが国の進歩的と自負する青年知識人のものでもあつたといつて過言ではあるまい。英語帝国主義に対するロシア語人民主義というような図式的感覚が、私にもあつたことは否定できない。1950年代、「言語は上部構造か」という命題が盛んに論じられた。簡単に言えば、ソビエトの言語学者マールが「言語は上部構造である」とした理論を、スターリンが「マルクス主義と言語学の諸問題」なる論文で、これを批判し、「言語は上部構造でも下部構造でもなくその双方に関わる」としたのである。学生時代から、この問題は私の耳元でかまびすしく聞こえていたが、そのような抽象的な議論はどうでもいと深刻に考えることもしなかつた。しかし、スターリンの主張は、敷衍していえば、「言語そのものには、基本的に、帝国主義も社会主義もない」ということになる筈だつたから、ロシア語人民主義という高熱に浮かされていた私には、かなり効果的な解熱剤になつた筈なのだが、事實はそうならなかつた。ロシア語こそ世界人民の共通語でなければならない、という意識は、私ひとりのものではなかつた筈だ。つまり、こうだ。社会主義が世界的に広がっていくにつれて、ロシア語も世界的になり、現在の英語に代わつて、ロシア語が世界の共通語になる筈だし、そうならねばならない。どこに、エスペラントなどの必要性があろうか、と。1949年中国が解放され、1953年朝鮮民主主義人民共和国が戦後出発を始め、1954年ベトナム

人民軍が勝利し、1961年キューバが社会主義を宣言し、そのいずれにおいても、ソ連の影響とロシア語の普及をみたわけであるから、ロシア語が世界的になるという認識は、空想的とばかりはいへなかつた。

実に奇妙な符合だが、1965年夏、東京で世界エスペラント大会があつたその時、私はロシア語研修のために、モスクワ大学に出かけたのである。私が、横浜港をソ連船で出港したのは、8月26日のことだが、この船には、東京大会に参加後日本観光を終えたヨーロッパのエスペランチストが乗っていた筈だ。だが、かえすがえすも残念なことだが、私の身心は、ソ連とロシア語で一杯で、エスペラントどころではなかつた。もちろん、世界大会のことは知つてはいたが、自身参加する余裕はなかつた。

初めてこの眼でソビエト社会主義を見られるという期待、ロシア語漬けで日夜勉強してきた自己過信、ロシア語人民主義という大まじめな信念、——この大きな期待と信念は、残念乍ら大きすぎた。10年近くも忘れていたエスペラントを思い出させたのは、何とも皮肉なことなのだが、モスクワ大学でのロシア語研修だつた。これは後からのゴジツケではない。滞在中の日誌に私は「やはり、エスペラントでなければいけない」と書き残して、最近それを読み返しているうちに発見し自分自身驚いているのである。どうして、そうなつたか、又次回に書かせていたゞくが、とにかく、その翌年1966年(昭和41)年6月から、つまり、エスペラントを離れてちょうど10年目に、数人の学生とエスペラント・サークルを作つて、勉強を再開したのである。(つづく)

山部エスペラント合宿参加者の印象発表

1. Tute nova kurso por komencantoj gvidate de s-ro KODAMA Hiroo
Kodama: En mia kurso aliĝis 2 ĉarmaj fratinoj, kiuj venis ĉi tien kun patrino kaj f-ino TOOYAMA, kiu prezentis la tradician te-arton hieraŭ. Mi ĉefe gramatike gvidis ilin, ĉar ili iom scias lingvan strukturon en lernado de angla lingvo.
Mi ne scias, ĉu mia gvido sukcesis aŭ ne? Tamen, se ŝi parolus kurage en Esperanto, tio signifus sukceson ĉu ne?
H. Satoo: Mia nomo estas Humiko SATOO. Kunloĝado estas por mi la unua. Kunloĝado donis al mi bonon. Mi volas denove ĉeesti la venontan kunloĝadon. Bonvole konatiĝu!
K. Tooyama: Mi estas Kyoko TOOYAMA. Mi estimas vin, ĉar vi tre diligente lernas Esperanton. En la okazo de kunloĝado mi havis amikojn kaj mi esperas, ke vi daŭre estu miaj amikoj. Bonvole konatiĝu! Dankon!
N. Satoo: Mia nomo estas Namiko SATOO. Mi unue ĉeestis kunloĝadon. Kaj mi havis intereson pri Esperanto. Mi volas denove lerni Esperanton en hejmo. Dankon!
2. Por ĵus finintoj de la elementa kurso de SES gvidate de s-ro HAMADA Kunisada
Hamada: Mia grupo estis s-ro Tojokura, s-ino Satoo kaj s-ro Morita. Nia grupo uzis kopiojn de "Klaso de Interparolo en Esperanto" verkita de TAKEUTI Yosikazu. Mi gvidis laŭ la kopio. Ofte ni devojiĝis, ekzemple, kristana erao estis kreita de Dionysius Exiguus en la 6-a jarcento.
S. Toyokura: Mi eklernis de ĉi tiu januaro. La Esperanto estas malfacila por mi. Ju pli progresas mian lernadon de Esperanto, des pli vastiĝas novan perspektivon. Dankon!
H. Morita: Mi ĝojas vidi vin en sano. Hieraŭ observante 現代の映像 fare de NHK, kiu prezentas la Esperanto-movadon antaŭ la 50-a universala kongreso, kiu okazis en Tokyo. Bonkora rakonto por Esperanto donis la kortuŝon. S-ro Kimura diris, kian opinion mi havas pri tia programo. Mi pensas, ke Esperanto-movado devos transiri de idealismo al realismo. Dankon!
H. Satoo: Miaj familianoj parolas hejme pri Esperanto, eĉ se mia parolo estas malbona. Bonvolu gvidi miajn filinojn al bonaj esperantistoj. Oni neniam maljuniĝas por lerni. Tiun proverbon mi kredas, kaj mi havas lecionon de metodo de lernado, plue mi sentas bonan guston kaj varman sencon de Esperanto. Por via bonkoreco mi elkore dankas vin!
3. Progresiga kurso por interparolo gvidate de s-ro K. KIMURA
K. Kimura: Mia grupo estis finintoj de Unua kurso. Mi preparis demando-frazojn facilajn, bild-kartoj, en kiuj estis desegnitaj bildoj plej ĝeneralaj, kaj bildojn de sidĉambro de familio.
(Per demandoj) Unua grupano demandas (legas) al alia. La alia respondas libere laŭ sia opinio. Fininte 5-7 demandojn, demandanto ŝanĝiĝas. Do, ĉiuj kursanoj estas demandanto kaj respondanto.
(Per bild-karto) Per bilda nomo grupanoj faras frazon sinsekve, miksante demandon, respondon.

(Per bildo de familia sidĉambro) Kursanoj respondas vidante bildon al demando. Kompreneble sinsekvas.

En ĉi jaro grupo estis malgranda. Pro tio grupanoj devis elparoli, demandi, respondi multfoje, vole nevole. Tio estis tre grava. Tial mi pensas. Ĉifoje estis pli efika kompare kun lasta jaro.

Y. Watanabe: Ĉifoje kelkaj amikoj ne povis partopreni en ĉi tiu kunloĝado. Estis bedaŭrinde! Mi dankas al vi ĉiuj, kiel unu el la preparantoj. Dank'al via kunhelpo mi povis plenumi mian rolon de la kunloĝado. En ĉi tiu kunloĝado mi provis aliĝi al la konversacia kurso de malgranda grupo. Tiu kurso multe efikis min. Kiel spertis aliaj grupanoj? Al mi estas tre ĝoja, ke komencantoj partoprenis interalie la familianoj de SATOO, al ĉiuj mi elkore deziras daŭrigi lernadon de Esperanto energie. Dankon!

M. Satoo: Mi unuafoje partoprenis kun mia patrino kaj kun miaj fratinoj en kunloĝado de Yamabe. Mi estis maltrankvile pro mia neglekto antaŭ partopreno. Sed nun mi estas tre ĝoja partopreninte kunloĝadon. Ĝis nun mi ne interparolis ĉe la kunsido, sed ĉifoje mi havis ŝancon multe interbabili kaj mi havis ĝojan tempon. Mi jam atendas la venontjaran kunloĝadon. Dankon!

Y. Miyai: Mi estas Yasuo MIYAI. Mi partoprenis en la 2-a kunloĝado. Mi estas kontenta, ke mi povis pasigi interesajn kaj ĝojajn tri tagojn kun kamaradoj energiaj. Koran dankon al vi ĉiuj!

4. Progresiga kurso por konversacio gvidate de f-ino KITABATAKE

H. Kitabatake: Celo de mia grupo estas, ke elkutimiĝu babili esperante, tial ĉar ĉiuj iros al Varsovio. Do mi ne uzas paperon, nek skribilon kaj mi helpis ilin por kurage babiligi, kaj ili vigle kaj ĝoje babilis pri ĉio, kion ili volas babili. Celo ja estas plenumita, mi kredas. Kaj sendube plenĝuos la kongreson, do mi estas kontenta.

E. Baba: Mia nomo estas Emiko BABA. Malfruan noktomezon mi partoprenis la kunloĝadon en Yamabe. Yamabe urbeto bonvenigis min, ĉar neĝis kaj pluvis. Do mia lernado progresis bone. Kiel vi ĉiuj scias, mi partoprenos la kongreson en Polando. Dankon pro laboro de KIRIKAE kaj YASUKO por la kunloĝado. Sekvantan jaron mi rakontos al vi ĉiuj, kaj tiam mi parolos pri la universala kongreso en Varsovio. Mi havos tre gajan babiladon, kiel mi spertis pasigi gajan tempon en Pekino. Dankon!

E. Yamagisi: Mi havas honoron prezenti mian impreson pri Esperanta kunloĝado. Unue mi dankas al mia instruistino Kitabatake elkore kaj sincere kaj ankaŭ al la preparantoj de ĉi tiu kunloĝado kaj al ĉiuj aliaj samideanoj. Dank'al ili mi fariĝis iom parolebla esperantistino helpe de veterana gvidantino. Do mi povos partopreni esperplene en la universala kongreso en Varsovio ĉijare. Bonvole atendu miajn, multajn, interesajn kaj belajn rakontojn pri mia vojaĝo. Sed ankaŭ al mi restas laboro por ke mi sciu pli multe da necesaj vortoj. Do, bonvolu gvidi min, mi petas!

Mi multe ĝuis bongustajn manĝaĵojn kaj sunriĉajn paŭzojn de la montpiedo. Kompreneble ankaŭ Esperanta kunsido al mi estis signifplene kaj agrable. Fine, mi deziras, ke Esperanta movado disvastiĝu. Dankon!

A. Segawa: Mi estas Ayako SEGAWA. Antaŭ unu jaro mi estis ĉi tie en kunloĝado. Ankaŭ ĉijare mi estas en ĉi tiu kunloĝado kun bongustaj manĝaĵoj kaj gajaj babiladoj. Sed mi preskaŭ japane parolis. Pardonon! Mia gvidanto varme gvidis min, sed mia Esperanto estas ne bona. Tamen mi iros al Polando!

K. Kobayasi: Karaj gesamideanoj! De nun mi parolu pri mia impresoj de la 2-a kunloĝado en Yamabe. Mi volas diri laŭvoĉe; Mi nun sentas, ke mi estas ege kontenta kaj plej feliĉa.

Partoprenante la kunloĝadon, dank' al bona gvidantino Hitomi KITABATAKE, al ĉiuj lernemaj partoprenantoj kaj al bonaj aranĝantoj, mi povis ĝui la etoson de kunloĝado. Por mi la celo de tiu ĉi kunloĝado estis plenumita, ĉar mi prenis konversacian kurson por altigi mian parolkapablon.

Hieraŭ posttagmeze la vetero fariĝis bela. Pro tio mi ĝuis rigardi belan monton Asibecu-dake, eĉ ekskursis al la montpiedo. Plie mi havis grandan emocion rigardante, ke mi povis sperti la filmon, kiun oni prezentis Esperantan movadon en Japanujo, antaŭ la universala kongreso okazinta en Tokio. Vidante la filmojn mi rememorigante nian Majstron mi veturos al Varsovio por jubili centjarigon de Esperanto.

Mi volas diri, ke renkonto de Esperanto donis al mi plej feliĉon. Dankon!

5. La kurso por lerno de interpretado gvidate de s-ro A. HOSIDA

A. Hosida: Unue mi elkore dankas ĉiujn kunlaborantojn de ĉi tiu kunloĝado. Antaŭ multaj jaroj mi ofte partoprenis tiajn kunloĝadojn, sed jam longan tempon tute mankis al mi tia ŝanco. Do por mi estas granda ĝojo kun multaj diligentaj gesamideanoj esti ĉi tie, kie okazis la unua Hokkajda Esperanto-kongreso en 1932. Laŭ komisiono de la organizantoj de la kunloĝado mi kuraĝis gvidi la grupon lerni interpretadon.

Mi celis ĉitie kune legi kelkajn literaturajn verkojn esp-ajn. Ĝin partoprenis s-roj Kawahara, Kirikae kaj Sakasita. Ili ĉiuj estis tre diligentaj, do mi mem povis bone lerni la enhavon de la libroj "Sur sanga tero" kaj "La verda koro" de Julio Baghy. Konfesante la veron, mi ne estas certa, ĉu mi gvidis ilin aŭ kontraŭe ili gvidis min.

Do konklude: Ni povis kune studi bone la du verkojn. Mi esperas, ke tia studkunsidoj okazu pli ofte en Hokkajda Esperantujo.***** Tiuj du verkoj temas pri la tempo, kiam japana armeo okupis gravajn punktojn sur la Siberia Fervojo de Vladivostok ĝis la Lago Bajkal. Tiam li estis militkaptito apud Vladivostok. Do en la rakonto aperas ankaŭ japanaj armeanoj vizitantaj al tiamaj esp-aj kunsidoj tieaj. Por la unua fojo ni legis en Esperanto tiajn rakontojn, kiuj tre vivece, detale kaj konkrete priskribas la histrion de Siberio dum la irado de la Rusa Revolucio.

K. Kawahara: Mi deziras paroli mian impreson de ĉi-jara kunloĝado koncize. Komence mi esprimas elkoran dankon al miaj gesam-

ideanoj, precipe al veteranaj specialan dankon. Dank' al vi mi povis kunvivi tri valorajn tagojn ĉi tie, kie ni kunlernis lastan jaron. Certe mi ankaŭ ĉi-jare pasigis agrable kaj estas pasiganta nun. Mi partoprenis la kunloĝadon kun granda atendo, ke ĉi-tiea lernado sendube profitigos min progresi lingvan kapablon. La sekvo neniam trompis mian atendon. Tial mi povos ekiri al Sapporo, portante etan memfidon. Refoje mi trovas, ke mia lingva nivelo estas malalta kaj ekzamenas min mem. Por esti vera esp-isto mi devas ankoraŭ pli diligente lerni.

Ĉe mi, esperanto mem estas ne celo, sed ilo. Oni ne bezonas diri, ke se la ilo ne estas plena, ĝi estas senutila.

Por tio mi devas paroli, legi kaj skribi en nia lingvo, ĉiam, ĉie, laŭ eble. Mi estas feliĉa en lernado. Ĉar mi havas eminentajn geantaŭulojn, kiuj bonkore gvidis min ĉiaokaze. Al la bonvolo de ili mi deziras respondi. Ĉu vi bonvolas rigardi, ke mia scipovo lertiĝis iomete, kompare kun ĝi en lasta jaro? Bonvolu gvidi min kiel kutime, mi esperas. Mi aldonas kelkajn. Mi tre bedaŭras, ke ne troviĝas ĉi tie kelkaj intimaj membrinoj de Rondo-Pupiloj, al kiu apartenas mi. Mi atendas, ke en la kunloĝado en sekvanta jaro pli multe da geamikoj kolektiĝos. Finfine, la plej ĝoja impreso mia estas en la gaja vespero: ni kantis la kantojn "LEONTODO" kaj "LA GRANDA KANTADO", kiujn mi treege amas kaj ofte kantas.

Karaj amikoj. Koran dankon, kaj ĝis la revido !

M. Sakasita: Same kiel lasta jaro ni kunloĝas en Yamabe. Dum la tagoj de la kunloĝado vetero estis bedaŭrinde ne tre bela, tial ni ne povis kune ekskursi. Tamen, dank' al tio lerna tempo estas longa pli ol lasta jaro, mi pensas. Mi havis kurson de traduko gvidata de s-ro Hosida. Teksto de tio estis unu parto de "La verda koro" kaj "Sur sanga tero" verkita de S-ro Julio Baghy. En tiuj verkoj verkisto rakontis pri tiuj, kiuj okazis dum la periodo de post la rusa revolucio en Orienta parto de Sovetunio.

Mi pensas, ke lerno de Esperanto donas al ni ne nur scion de la lingvo, sed ankaŭ komprenon de historiaj faktoj.

Mi kredas, ke per lernado de Esperanto ni povas havi la fenestron malfermatan al mondo de diversaj nacioj kaj aferoj. Ni, 21 personoj, junuloj kaj maljunuloj viroj kaj virinoj, havante saman celon, lernadis Esperanton dum tri tagoj. Tio estas tre bela, mi pensas. Mi elkore dankas al ĉiuj, kiuj preparis ĉi tiun kunloĝadon, kaj ankaŭ dankas al niaj gegvidantoj. Koran dankon !

H. Kirikae: Mi estas tre feliĉa, ke mi lernis kun miaj karaj amikoj en ĉi tiu bela urbeto. Kaj mi estas ĝoja, ke mi revidis sinjoron Hamada post unu jaro, kaj mi estas plezura, ke ni konatiĝis kun ĉarmaj knabinoj de Sato-san kiel junaj samideaninoj. Mi preĝas elkore, ke ni revidu unu la alian en la venonta kunloĝado kaj trovu nin tiam kreskigi kiel pli bonaj esp-istoj kaj esp-istinoj.

昭和62年(1987年)5月25日(月曜日)

ぶらり訪問

北海道エスペラント連盟 会長 三沢 正博氏



エスペラントが考案発表されてから今年百周年を迎える。民族の平等と世界平和を理念とする世界語・エスペラントの話し声は、わが国では小さくて聞きとれないが、今年是世界各地で記念行事が計画されている。道内では大きなイベントこそ少ないが、数少ないエスペランティストたちが講習会を開くなどして地道な普及活動が続いている。英語という民族語が国際語ないしは世界語だという認識が強まっている中で、エスペラントの存在価値はどこにあるのか、道教育大教授で北海道エスペラント連盟会長の三沢正博氏に話を聞いた。

(聞き手・佐山仁志報道部長)

一言弁解 三沢 正博

去る5月25日(月)「北海タイムス」紙の『ぶらり訪問』欄に、私の記事がでていました。記者とカメラマンが大学研究室に見えて、30分ほど対談をしました。

これは、私自身の書いた文章ではなく、記者の筆になるものですが、私が話したようにカギ括弧づきで書かれています。

文中、最後に近いところで、私が「若い人たちは見向きもしないが」と言っています。

実際そのとおりに言ったのかもしれませんが、私の頭にあったのは、「大学生たち」のことで、「若い人一般」ではありません。英語や独語の単位をとらねばならぬ大学生たちとエスペラントの状況を話す中で、語った言葉です。30分も話した中から、記者が縮小して書いたので、不十分な点があるかもしれません。

一生懸命、エスペラントを学んでいる「若い人たちに」失礼な発言と受けとられそうなので、一言、弁明いたします。

国際的補助語
の役割目指し

「エスペラントに庶民が魅力を感じる最大の理由は学びやすさにある。民族語と比べて文法が非常に簡単で、エスペラントを学ぶのに三日もかかった、という笑い話があるくらいです。私が教えた経験では、大学生なら半年学べば、今まで留って来た英語と同じぐらいの力がつく。もちろん話すことも、聞くこともです。ザメンホフ（ポーランドの眼科医）が作った

△略歴△

三沢 正博氏（みさわ まさひろ）昭和五年、東京生まれ。東京外国語大学卒。東大大学院教育学専門課程を修了後の三十二年、道教育大助手、五十一年に教授。比較教育学専攻。主にソ連と東欧諸国の教育事情を研究。「ポーランドにおける教育養成制度の改革」戦争をどう教えるか（共著）などの著書のほか労働学校と総合技術教育（フロンスキー著）などの訳書も。北海道エスペラント連盟会長。



この言語は、名詞なら語尾が全部Oで終わるように品詞の色分けが

したら都合がいいのではないかと、という論理が出てきます。しかし、

国境のない世界、魅力

半年でほぼマスター

はつきりしている。そんな機械的な文法で民族語のように通用するの、かという疑問を抱きましたが、一九七一年にロンドンで開かれた世界大会に出席して以来、その疑いが解きました」

「エスペラントでおしゃべりをしている、そこには国境のない世界が生まれる。国際補助語という性格を持ち、支配的な言語ではないからでしょう。よく誤解されることですが、それなら民族語はやめて世界中全部エスペラントに

それはエスペラントの本質ではない。民族語はそれぞれ大切にしながら交流の補助的な手段としてエスペラントが使われれば理想だと思う。ザメンホフの動機は言語による民族間の摩擦を解消することにもありました」

※ 東京世界大会で盛り上がり ※
※ モスクワ大にロシア語の研修に行ったとき、ソ連に来て英語は

話すな、という。フランスでもそんな雰囲気です。民族の誇りは当然持っているのですが、外国人にそれを押しつける必要はない。大國であればあるほど、押し付けの傾向が強い。エスペラントとしても、英語が国際間の交流と意志の伝達に果たしている役割は大きく、よく世界に通じるという現実是否定するものではないのです。しかし、一歩市民の中に入ってみれば意外に英語が通じないことに気づく。英語を学べば国際人になるという発想は単純すぎる。英語も民族語の一つなんです」

「私が感心しているのは、みんな仕事を持っている人たちのために、毎年、エスペラントの講習会を開いて普及に努めているということです。たとえ生徒が三、四人でも講習は続いている。若い人たちは見向きもしないが、私たちはエスペラントの存在、言語差別を超越した人類の理想を求めてエスペラントを学んでいる人がいるというところは少なくとも知ってもらいたい」

「世界ではドイツ、フランス、東欧でエスペラントを学んでいる人たちが多い。中国では世界語といえはエスペラントのこと、北京放送局はこの二十年間毎日エスペラント放送を続けている。私たちにとっては隣の国、中国とエスペラントで交流ができれば理想的だと思つ」

※ 毎年講習会を開いて普及 ※
※ 私感心しているのは、みんな仕事を持っている人たちのために、毎年、エスペラントの講習会を開いて普及に努めているということです。たとえ生徒が三、四人でも講習は続いている。若い人たちは見向きもしないが、私たちはエスペラントの存在、言語差別を超越した人類の理想を求めてエスペラントを学んでいる人がいるというところは少なくとも知ってもらいたい」

《北海道新聞》5月26日朝刊一ページ欄一

この署名の取扱者の栗田公明氏からこれまでの運動の状況について連絡があったので、つぎに紹介します。

1987-06-11

国家機密法反対署名協力者の皆様へ

ご存じの通り国家機密法は、幅広い国民の反対の声のおかげで、前通常国会には提出されませんでした。次回通常国会に提出される危険性は多いし、臨時国会といえども油断はいえませんが、ここで腰を据えてやりたいと思っています。とりあえず11日現在の署名の集計は、

(1) 送られて来た署名の数:

205枚、860人分

(2) 切手等によるカンパ:

148,650円でした。

栗田公明

交流の補助語に
世界共通語を目指す
すエスペラントが使
われて、今年で百年
を迎える。八月に、
発祥の地ポロランド
・ワルシャワで開か
れる世界大会に参加
する宮岸忠孝さん
(笑)札幌マスコミ
伝道センター事務長
は、「エスペラン
トを身につければ、
世界五十カ国の人と
文通が出来る」と話
す。



ドのザメソフ博士
がつくった。一字一
音、アクセントの位
置が固定している点
な点文法が明確なの
を意味しているの
で、だれにでも話せ
るはずだ。
五十四年、道庁を
定年で退き、現職へ。
エスペラント歴は八
年になる。世界には
マスターしている人
が百万人以上いる
が、札幌はまだ百人
ほど。「各国のそれ
ぞれの言葉は長い歴
史に彩られた民族の
魂。エスペラントを
交流のための補助語
として学んでいただ
きたいですね」とい
う。

が特徴だ。「既存の
言語には民族ごとの
個性があり、共通語
とするのは難しい。
その点エスペラント
は、各国の言葉の文
法、アクセントなど

お知らせ欄

☆ 三沢会長がHBCラジオに出演し、エスペラントについて語る。

ハロードライバー・一口ゼミナールのラジオ番組のところで、7月13日から1週間にわたり、毎朝8時30分前後に約3分間、エスペラントについて放送されます。

☆ 北京UK印象記 Esp版できる!

HEL発行の北京UK印象記の Esp版を Rondo-Popiloj が発行することになり、7月中旬に印刷が出来上がりますので、ご希望の方はお申込み下さい。

一部 300円 送料 170円

* 申込先 001 札幌市北区北12条西1丁目
北12条パークMS 602

阿部 映子

* 郵便振替 小樽 8-6864 阿部 映子

署名用紙はご請求があれば、お送りします。河原または岩井までご連絡ください。

編集後記

本号は、いつもと違いページ数が多くなりました。それは、山賀先生の追悼記事を掲載したことによりますが、これは次号にも続く予定です。また、5月3-5日までの3日間、富良野市山部の大木北海本苑でエスペラント合宿を行いました。その最終日にそれぞれ全員がエスペラントで印象発表した内容を本号に載せました。初めてエスペラントを口にした人、ベテランの人、様々ですが、特に印象的だったのは、今年の第1回合宿にも参加した人達の1年後の目覚ましい上達ぶりでした。発表の順序は、コース別に初めにリーダーのコメント、次いで参加者の発表です。是非御一読を!